

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

有持旭

【所属】(助成決定時)

東京藝術大学大学院映像研究科映像メディア学専攻博士課程

【研究題目】

エストニア・アニメーション史の解釈による民族学的シュルレアリスム思考

【研究の目的】(400字程度)

90年代初頭に、歌を歌うことでソ連から独立した小国エストニアは、Skypeを生み出したIT先進国である。この特異な歴史と文化形成を持つ国は、戦後からおよそ50年間、他国からの芸術があまり入ってこなかった。その代わりにこうした社会の不条理な状況に対する皮肉が風刺画として描かれ、文芸新聞や風刺雑誌を通して国民はそれらを見てきた。また一部の風刺画家たちは前衛芸術グループを結成したり、アニメーション作家に転向した。この点は、世界アニメーション史において特例であるが、こういったアニメーションと風刺画や前衛芸術の関係に関する研究は、未だ殆ど研究されていない。このまま手付かずであれば、将来的に一次資料すら確保することができない。

申請者はこれまでにエストニア芸術アカデミー客員研究員としてフィールドワークを重ね、少しずつエストニア・アニメーションを体系化してきた。本研究では、エストニア・アニメーションと風刺画や前衛芸術の相互影響に関して文献調査と聞き取り調査を行う。オーラル・ヒストリーを行うことで、エストニア・アニメーションの史実を明らかにできると考える。

【研究の内容・方法】(800字程度)

明確にする内容は、前述した背景とこれまでの研究成果をもとに、まずエストニア・アニメーションを代表するプリート・パルンに焦点を当て、60年代から80年代のエストニアにおける印刷物に掲載された風刺画と、70年代から90年代に活動した前衛芸術グループに焦点を当てる。その後、それらとソビエト社会がどのように交差し影響を及ぼしていったのか明らかにする。それらによって、アニメーション作品に包容されている「ユーモアと不条理」を読み解き、エストニアの民族学かつ社会学的なアニメーションについて考察する。

研究方法は、まずエストニアの国立博物館や公文書館で民族に関する調査を行うほか、エストニア芸術の歴史にとって重要なパラスの実績を分析する。また、エストニアのポップアートやパフォーマンス、オブジェといった前衛芸術が同時代のアニメーションとどのような関係にあったのか比較する。これらと並行して、印刷物に掲載された風刺画の収集も行う。この資料を基に、風刺画と当時の社会情勢を照らし合わせ、風刺画家と編集者が社会の何をどのように解釈して人々へ伝えようとしたのか分析する。資料収集では、①前衛芸術グループの作品が現在どこに保管されているのか調査し作品を撮影する。②パルンの風刺画が掲載された新聞や雑誌を収集する。③パルンによる絵コンテやイメージ画を撮影しデータ化する。聞き取り調査は、当時の状況についてアニメーション作家6名に行う。例えば、パルンは東欧の雑誌を定期購読しており、そこから多くの影響を受けていた。申請者が昨年度収集したそれら風刺画の資料を今回のインタビュー時に見せることで、パルン自身が受けた他国の芸術文化による影響について具体的に聞いていく。また、昨年度の聞き取り調査と同様の質問を別のアニメーション作家に行うことで、その整合性を再確認し歴史研究としての強度を高める。

【結論・考察】（４００字程度）

ケネス・コックスは『不在についてのナラティブ』のなかで、「シュルレアリストと呼ばれる実践を分類するのは、社会的、政治的、道徳的な側面から押し上げられる意思と知性の問題である。それはつまり感受性であり、世界の見方と行動の方法である」と述べている。パルンらのシュルレアリスト・グループが当時のソビエト社会を象徴するモチーフである紙製スーツケースに粗大ゴミを付けて、それが芸術作品であることを芸術家協会に認めさせて、エストニア人にとって自己を確立する要素であるバルト海を渡り、国外での展覧会を可能にしたことは、その適例である。

このように、日常の集団的経験（社会での不条理な出来事）から個人的思考が逸脱する際に生じるシュルレアリスム的感覚を一際パルンは持っていた。社会主義への反発による前衛的な態度のなかに民族誌的要素が自然と孕んでいたわけである。また、不条理をユーモアに転換させる芸術家としての身振りは、シュルレアリスト的な行動とも言える。つまり、ペレストロイカ以降の多少動きやすくなったソビエト社会のなかで、ディレタント特有の民族誌学的行動がシュルレアリスムとして生成され、その一環として「ユーモア」が行動や態度として表れるようになったと考えられる。

アニメーション制作をしている風刺画家によって結成されたシュルレアリスト・グループの存在やその活動は、エストニアの芸術史とアニメーション史、双方においてこれまで歴史の表舞台に出ることはなかったが、風刺画家がシュルレアリスト・グループをつくり、アニメーション作家がシュルレアリスト・グループをつくった、特異なものであったことは確かである。